ロックよ、静かに流れよ

吉岡紗千子

吉岡紗千子（よしおかさちこ）
1941年，東京に生まれる。65年，国学院大学史学科卒業と同時に結婚。80年のパリ旅行の体験をまとめた『死者からのラブレター』を同年自費出版。81年，離婚。東京から長野県松本市に移る。出版社，弁当屋，広告代理店などの職を経て，84年，再び東京へ。現在フリーライターとして活躍する。著書に『しなやかに，マイペース』（径書房刊）がある。

ロックよ、静かに流れよ

一九八四年七月十日第一刷発行
一九八八年十月十五日第十七刷発行

定価　一二〇〇円

著者　© 吉岡紗千子
発行者　原田奈翁雄
発行所　株式会社径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二―一三―五　影山ビル
TEL　〇三―二三四―四六〇八
FAX　〇三―二六三―七〇一九
振替口座　東京一―三二七二六

印刷　明和印刷株式会社
製本　京美印刷株式会社　株式会社積信堂

0037―0015―2507

日本音楽著作権協会（出）許諾第8460040―817号

ロックよ、静かに流れよ

吉岡紗千子

径書房

●目次

はじき出された子どもたち——5
追悼コンサート開演三〇分前
新宿発直通列車の終着駅
ドレミファソラシド、ハモニカ長屋
一所懸命に生きてる人が好き
息子よ、お前ひとりを悪者にしやしない

大人ってなんだ——27
通知表で評価できないもの
豊かな社会と不毛の大地
大人は信用できねえ

敗者復活——41
東京見物とイチゴパフェ
ツッパリたちの言い分
言葉にふさわしい自分になりたい

ミネさが、死んだ——55
気分はすっかりミュージシャン
人間ってやり直せるんだね
ミネさが、死んだ
一粒の涙
宣戦布告
ないないづくしからの出発

さよならなんて言わないよ——101
あったかいほっかほか弁当
ちっぽけな幸福なんて欲しくない
非行のはじまり
奇蹟よ起これ
やり直しの道、見つけた
追悼コンサート前夜
やってやるじー、ばちっと
これでいいんだね、ミネさ

それぞれの旅立ち——155
君の誕生日
もう後には戻れない
つっぱりおばさんと秋冥菊
淋しいのはお前だけじゃない
ミネさが残してくれたもの
「ツッパリ」の四文字が消えた
前向けえーっ、前っ！
あとがき——186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　福澤郁文

はじき出された子どもたち

追悼コンサート開演三〇分前

一九八二年十二月二十七日、今にも降り出しそうな雲が垂れこめてアルプスは見えない。ここ松本は三年前の「やまびこ国体」を境にすっかり変った。近代化された商店街は、そっくりそのまま東京なのだけれど、通りすぎるのはまばらな人影と、あとは風ばかりだ。映画館、パチンコ屋、食堂が訪れる人もなく静まり返っていた。

通りの中ほど、「コイケ楽器」の入り口だけがザワザワと騒がしい。バイクがある、自転車がある。群れているのはどれも、革ジャンパーにリーゼントの若もの、そして彼らに似合いの少女たちだ。

エレキギターを並べたショーウインドーには、中が見えないほどポスターが貼りつけられている。「リヴォリューション・ファースト・コンサート」、黒い文字が、小さなつむじ風にピタパタと乾いた音をたてていた。

会場は、ショーウインドー脇の白いらせん階段を登り

つめたところにある。百人を収容する小さなホールだ。
午後二時を少しまわっていた。開演は三時、まだ時間はたっぷりあるのに、中には奇妙な興奮が渦をまいていた。すでに三〇人をこす観客、その間をすりぬけて働いている一〇人ほどの少年、どれもこれも店先にたむろしている連中と同様のツッパリとズベ子ばかりだ。
ざわざわと続くおしゃべり、けたたましい笑い声、そして時おり「おい、そこの客！　もっと前へ詰めろ」だの「女ばっかで寄ってねえで散らばれっ！」とすごいダミ声が怒鳴る。「おいっ、てめえら！　つまんなくたって帰るんじゃねえぞ。何ったって、これは追悼コンサートなんだからな」

「何モタモタしてんの、開演まで三〇分しかないよっ！」
楽屋口の開けっぱなしの扉をひっぱたいて声のかぎりに私は叫ぶ。中の連中は、はしゃぎまくっていて誰も気がつかない。メンバー全員、高校一年生、と言いたいが一人だけ中退したのがいる。扉を思いっきりけとばしてもう一声張りあげる。
「コラーッ、バカ、集まれーっ！　ミーティングやるよ」

「はいよっ」と威勢良くでてきたのは〝トンダ〟だ。シャツもズボンも黒ずくめ、盛大におったてた髪にまっ赤なバンダナを目がつり上がるほどきつくしめている。いつだってケンカ仕度、心も服装も……それが彼の個性だ。
「おい、てめえら、いいかげんにしろっ！」
トンダは、ものすごい巻き舌でガナった。
「さっさと出てこいっ、いつまでガキみてえにさわいでんだ」
彼は今日デビューするロックグループ「リヴォリューション（革命）」のリーダーである。
「いま、行くじー」
方言丸出しはドラムの〝トモ〟だ。ピタリと細い革ズボンに白いシャツ、麦わら帽子をおかしいほど斜めにかぶった姿は、少々間ぬけな伊達男（だておとこ）といったところだ。
「ち……ちょっと待っちくりやな」
スプレー片手にあわてふためいているのは〝センセイ〟だ。玉子の薄焼きをつくらせたら右に出る者はない。これ以上ヤセようのない細い身体に、これまた細っこい顔、目も鼻も口も小ぶりでいかにも頼りない。彼は高校の食物科一年生だ。だからこそ玉子の薄焼きを軽々とこなしてセンセイの称号があるわけだ。それが今日に限っては重大なハンデになっている。調理実習のため髪を伸

ばせないのである。
ギンギンに髪を逆立てる、それがロックをやる者の基本的ファッションなのだ。トンダもトモも他の連中も、頭皮に九〇度の角度で髪を立たせるのに成功している。私に言わせりゃ、ビックリねずみの集団だ。
そこでセンセイは金色のスプレーで対抗しようと思い立ったのだ。ところが本来丸坊主よりややマシ、という長さだから地肌や額ばかり染まって、肝心の髪はところまだら、正月の餅についたカビみたいにしかならない。彼の受けもちはベースギターだ。
友情出演の〝シン君〟も髪の毛では苦労している。生まれついての猫っ毛を「ディップ」という強力なセットローションで固めて逆立てたまでは良かった。しかしさしもの強力ローションの効力も三〇分が限度らしい。ストーブなんかに近よればひとたまりもなく寝てしまう。彼はエレキギターの腕をトンダに見込まれてムリヤリの友情出演であった。
「母ちゃん、ちょっと……」
もそっとあらわれたのはサイドギターを受けもつわが息子〝シュンスケ〟である。バンダナを手に悪戦苦闘している。ものすごい縮れっ毛は、長く伸ばしたからって、美しいウエーブになんかならない。パーマをかけるときのロールをはずしたての髪、ちょうどあんな具合になるだけだ。そのややこしいのをかきわけて眉ぎりぎりにバンダナを巻くつもりらしいが、すぐにずるんとぬけて幼稚園の運動会みたいになってしまう。
「おばちゃん、聞いちくりや、ほーんと、やんなっちまうぜ」
ライト係の〝ガッちゃん〟が廊下をすっとんできた。モジャモジャの柔らかい髪、つぶらな瞳、いつでも口をとんがらせている。テレビマンガ「アラレちゃん」に出てくる怪力の赤ん坊・ガッちゃんそっくりなのだ。これがつい最近まで、トンダと勢力を二分する札つきのワルだったなんて想像もつかない。
「入り口で呼びこみやってたらさあ、ママポリ（ママポリス――PTA補導員）が来やがんの、そんでさあ、『どうせ不良の集まりでしょ』とか『追悼なんて言って何やってるんだか』とかグダグダとケチつけやがんの、オレさあ……」
「なにっ、ママポリがどうしたって」トンダがわりこんできた。「そんでお前、何か言ってやったかい」
「まさか……乱暴なこと言ったり、したりしなかったでしょうね」私はハラハラとたずねる。
ガッちゃん、ニコッと笑うと胸を叩いた。

「まあ、おばちゃん、聞いちくりや。オレ、ちゃーんと言ってやったじー。『そう思うんなら中へ入って自分の目で見てくれ』ってさあ」

「あんたはエライッ！」ようやく金髪になったセンセイが合いの手を入れた。

「マネージャー、マネージャーっ！」叫びながらドシンバタンとすさまじい足音が近づいてくる。〝オバ〟だ。長ったらしい姓を詰めているうちにできた呼び名であって、決して、「オバケのQ太郎」みたいな体型に由来するわけではない、と本人は力説している。でも、本名ワカバヤシのどこをどう詰めたってオバにはならないはずなのだ。

彼は本日のコンサートの裏方リーダーであり応援団長でもある。その上に受け付け、接待、案内……何でも彼でも引きうけて嬉しがっている。野球やりたい一心で長野市の高校に入った。一人で下宿ぐらしをしている。ゆうべ遅くかけつけて今夜のうちに帰る。高校野球児には、暮も正月もないのだ。

「マネージャー、どうしようか。イス足んないみたいだ……でもあれ以上並べると通路がなくなるし……それからねえ、マネージャー、花束を渡すきっかけは、どう出してくれるの……それからっと……一ぺんにわっと行かせるか、一人っつにするか……」

彼がしきりに呼んでいるマネージャーとは私のことだ。正確にはプロモーターなのだが、野球少年相手では仕方ない。

「まあ、まあ、オバ、とにかく座れよ」

トンダがリーダーらしいいたわりを見せる。まったくオバときたら昼食も抜きで走りまわっている。興奮のあまり、寒さも空腹も感じないらしい。この寒空に薄い木綿のつなぎ一枚きり、背中が丸見えになっているのに鼻の頭は玉の汗だ。

オバがベンチをきしませて座る。その隣がトンダ、そしてトモ、シュンスケ……座りきれない連中は中途半端な恰好(かっこう)でしゃがみこむ。

「さあ、いよいよだね」

急にシーンと静まりかえった廊下に私の声がカン高くひびいた。

「あーあ、これでミネさがいたらなあ」

シュンスケがポソッとつぶやいた。誰もが深いため息と共にうなずく。

ミネさ……二か月前にバイク事故であっけなく逝(い)った友の名である。彼の死、それをきっかけにして今日のコンサートがある。それはわかりきっていることだけれど

……。

こみあげてくるものを感じながら、私は初めてミネさと出会った春を思いうかべていた。

新宿発直通列車の終着駅

それは、わがほやほやの母子家庭が松本へやってきたばかりのころだ。一九八一年四月一日、東京とちがって始業式はこの日に行なわれる。

小学六年になった娘のほうは、すぐに親しくなった友達と楽しげに出ていった。それにひきかえ中学三年のシュンスケは、心細さを見せまいと肩怒らせて一人で登校してゆく。

見も知らぬ土地、見も知らぬ環境へ入ってゆくのだ。あっけらかんと田舎ぐらしを楽しんでいる妹……小学生ならそれですむかもしれない。しかし、中学三年は多感な年ごろだ。ひと一倍、きちょうめんで律儀な性分だから、なれるまでに、永い時間と努力がいることだろう。どうか良い友達に逢えるよう……祈りたい気持で見送った。

昼すぎ、「ただいまっ！」と元気な声がひびいた。出るときとは見ちがえるほど明るい声、そして明るい笑顔のシュンスケだった。

彼の広い背中にかくれるように立つ一人の少年、「こんにちは」とも「初めまして」ともいわずに立っている。

「クラスはちがうんだけどさ、家はすぐこの下、すごく気が合っちゃってね、ああ、そうだ、こいつ、ミネさ」

シュンスケがしゃべるたびに少年は黙ったままうなずいてみせる。

背丈も身体つきもシュンスケより一まわり小さい。ちょっと猫背で腰をかがめたような姿勢が中学生にしては年寄りくさい感じだ。シュンスケの紹介が終ったところで、静かに笑うと両頬に深いしわが刻みこまれた。若々しい、少年らしいとはお世辞にも言えない。これが、ミネさ登場の記念すべきシーンだ。

両親の離婚以来、無口になったシュンスケである。それが今、ミネさを相手にしゃべっては笑い、息をつまらせては、また笑っている。良かった、本当に良かった。朝から重たかった私の心が、スカッと晴れわたる思いだった。

しゃべりまくる息子に、ミネさは「ウン」とも「ウウン」ともつかない合づちを打っている。ひどく楽しげに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

……。彼は息子をあるがままに受け入れてくれたのだ。

このとき、息子をゆったりと受けいれてくれた彼の表情こそ、私が心から欲しかったものだった。別居、家庭裁判所、そして離婚に至るまでの約半年間、ただ黙ってうなずき、ほほえんでくれる人が一人でもいてくれたら、どれほどおだやかな気持ですごせたことだろうか。

「わがまま説」「怖いもの知らずのバカ説」「自立ファッション説」「片親にするな説」など……百人百色の説教を押しつけられた。「人生は、そんな甘いもんじゃないんだから」というセリフは夢の中にまで出てきた。「めぐまれすぎてるから、いけないんだ」というご高説も、よくうけたまわった。

夫が「出てゆけ」と言うから出てきた。「子の世話はできん」と言うから二人ともひきとった。そして、これからどうしようか、と前に向き直った時期に、これだけいろんな人生論やら、お叱りやらをうけたわけだ。十四年間の専業主婦時代、従順に素直に生きてきた末がこの有様、しかも、それじゃおしまいにしようと言うと、集中砲火を浴びるのは女ばかりなのだ。

実家は母ひとり、東京都内でアパートを経営している。ぶら下がれば母子三人食べてゆける。孫可愛さに、母は帰ってこいと連呼していた。素直に甘ったれてしまえば良い、と思っていた私だが、あまりの口うるささにムカッ腹が立ってきた。

四〇歳を目前にして、二人の子を抱えて生きてゆこうとしている女に向かって「めぐまれすぎてるから……」とは何だ。実家があるから、アパートで食えるから……そんなこと計算したわけじゃない。めぐまれないで、母子三人のたれ死ぬほどなら離婚すまい、なんて、あまりにも女をバカにした話じゃないか。だいたい私を、ああの、こうのと説教してる連中は何なんだ。主婦の座にドデンとあぐらをかいて、自分ほどエライものはいないって感じでふんぞりかえってるじゃないか。めぐまれすぎてるのは、自分たちの方じゃないか……と、開き直ってしまう。逆境では女の方が強いと言われる。それは、こうやって寄ってたかって皆さんで強くしてくれるのである。

勤めに出るのが良いと思った。三九歳、子持ち、特技なし、職歴なし、免許なしの私だ。掃除婦、店員、お手伝い、何でもいいから、外へ出てしまおう。そうすれば、口うるさい連中や冷たい視線からも逃がれられる。職種など何でもかまわなかった。ところが周囲の連中はおおいにかまうのだ。みっともない、どうせ永続きしない、身体をこわすにきまっている、やりもしないうちから反対の大合唱だ。

悪いのはそればかりではない。子供たちが変ってきた。ことにシュンスケがいけない。髪型、服装がツッパリじみてきた。そして、言葉づかいも生活態度もひどく投げやりに変っている。周囲の大人たちの、これまでに見たこともない表情をかいま見てしまったのだ。彼にとっては、あたかも世界が牙をむいて襲いかかってくるような気分がしたことだろう。

誰が訪ねてきても、あからさまな敵意を見せるようになる。祖母、母、妹と女ばかりになった一家を守るために、オレがしっかりしなくちゃ……それが裏目に出てしまったのだ。

そんなとき松本に住む知人がわが家を訪れた。彼女曰く、

「松本は全国的に失業率が低いの。観光地だからパートはいくらでもあるし、主婦だってほとんど仕事してるわ。もともと信州は女が働くところだから……」

〝これだ！〟と思った。母子三人、脱都会を企てよう。仕事があって、我々の今までのいきさつを知らない人ばかりがいて、豊かな自然があるところ……調べるほど松本が気に入った。

新宿からの直通列車の終着駅というのが良い。ものすごい方向音痴の私でも、これなら間違いっこない。

公害はないし、美ケ原や上高地といった健康的な遊び場がいっぱいだ。さらに信州は昔ながらの教育県だ。加えて松本は福祉宣言都市、母子が身ぐるみでとびこむのに、これ以上の場所はない。

たちまち、ものすごい非難がまきおこった。「どうして、そんな田舎へ……」から「都落ちですね」「逃げちゃうの」……いちばん身にこたえたのは、これまで陰に日向になって励ましてくれた数少ない友人の言葉だった。「もし病気したら、仕事がうまく行かなかったら……お先まっくらじゃないの」

そう、たしかに何の保証もない。毎日が、綱わたりみたいな暮らしになるだろう。二人の子供をブラさげたサーカスは、生やさしい芸当ではない。

でも、考えてみたらこのままじっとしていたって先はまっくらなのだ。実家にいれば、生活は安定するだろう。少くとも冷汗かいて働かなくてすみそうだ。しかし、それだけが望みだったら離婚なんかしなければ良いのである。

ひとはパンのみにて生きるにあらず——私にとってパンの他に必要なのは自由だ。それを得るためなら責任と義務を二つながら背負って綱わたりでも何でもやってしまおう。先は見えない。でも、まっくらで見えないわけ

じゃない。眩しすぎて見えないのだ。

昔見た映画の中に、こんな素敵なセリフがあった。

「本当に能力のある者は道を拓く必要はない。世界の方が道を開けてくれるものなんだよ」

驚くべきことに、私にもその能力があったらしい。

秋から冬にかけて、何回か下検分に訪れた私の目に、県営住宅入居者募集のポスターがひっかかってきた。三Kで家賃五千三百円也、しかも市内の一等地、東京なら田園調布といった場所に建っている。バス停もスーパーも風呂屋も目と鼻の先に並んでいるという願ってもないところだ。

申し込み資格は、三か月以上県内に住むか、働いている人とある。ここであきらめればタダの人、幸いにして私はタダの人ではない。もう一度じっくり入居条件を読みふける。すると〝住居に困窮する者〟という一項があった。そう、困っているという点では、誰も肩を並べる者がない。母子家庭、県内に親戚縁者いっさい無し、職もこれから探すつもり……事情を聴いていた担当の人がすっかり同情してくれた。

それにしても競争率は六倍ある。三月に当選と決まったときは、奇蹟と言われたものだ。

さらに松本市内でただ一つのタウン誌を発行している会社に、コネなしで就職できた。はるか昔、PTAの広報部長をやったことがある。そのわずかばかりの体験を誇大に吹聴する能力もまた持ちあわせていたのである。

お城を中心に、端正に広がる町並み、それでいて駅前は新宿直通の文化圏だ。映画もファッションもベストセラーも東京と少しも変らない。教育県だけあって学校施設は整っており、校庭の広さに至っては、息子が通う都心の中学の十倍どころではない。ポルノショップ、トルコ風呂、モーテルといった、なまめかしい看板もない。温泉もある観光地にしては、清々しい雰囲気がただよっていた。そして何よりも、美しい大自然がある。幾度も偵察をくり返すうちに冬がすぎていった。

そんな折、泊っていた宿の主人にすすめられて穂高にある碌山美術館を訪れた。

二月の安曇野は、まだらな雪の中だった。身も凍るアルプス颪の中に、小さなレンガづくりの建物はあった。絵ハガキで、ポスターで見なれた可愛い建物は、一歩足を踏みこむと、たちまち様相を変える。

すさまじいばかりの気迫、張りつめた深い悲しみ、そして絶望。代表作「女」の彫像、ロダンを師と仰ぎ、日本の彫刻界に黎明をもたらしたその作品は、まぎれもない日本のかたちである。

天を仰ぐ顔、後手に腕を組んだ姿態、それは耐えがたい運命に耐えている日本の姿だ。その瞳には、望みえないものを望みつづける人間の深く激しい絶望が燃えていた。

安曇野は、彼方にアルプスが連らなる豊かで晴やかな田園である。そのまっただ中で、いち早く近代に目ざめた若者、碌山がつくりあげたのは、絶望のかたちだったのだ。

外に出ると、夕やみが空を閉ざそうとしていた。雪のせいか、地表はまだ明るい。山肌が今にも手が届きそうに近かった。おだやかに広がる冬の田園風景、この底にはしかし容易ならざる黒いドロドロとした底流があるのではないか。碌山をして、絶望のフチにおとしこんだような昏いものが目に見えぬところで蠢(うご)めいているのかもしれない。

自然のふところに抱かれた暮らし、あこがれとして見ているうちは美しいけれど、実際そこに住んでいる人にとっては耐えがたいほどの重いしがらみがひそんでいる……私たちも、それに足をさらわれるのではないか……漠と感じた思いは、やがて現実となって私たち一家を襲った。

ドレミファソラシド、ハモニカ長屋

四月といっても風は冷たい。まして午前七時だ。大気はいまだ冬の匂いをはらんでいた。ミネさの叫び声が響きわたる。

「ヨッシオッカクーン！」

彼が一日にたった一ぺんだけ若く感じられるときだ。始業式の翌日から、ずっとこれだ。

朝だけではない。夕方も、土曜日の午後も、日曜日にもやってくる。シュンスケとは互いに親友と認め合っていた。

これが男の子と女の子だったら一目ぼれのアツアツというところだろう。とにかく好きで好きで、片ときも離れたくないのだ。

「ねえ、ミネさってジェームス・ディーンに似てると思わない？」とシュンスケが言った。「エエッ！」と私はあきれかえる。いくら親友だって身びいきがすぎるというものだ。柔らかくウエーブした栗色の髪、しいて似ているところを探して、ようやく思い当ったのはこれだけ

だ。細い目、丸い鼻、どこから見たって、わが青春のあこがれの人、かのジミーとは重ならない。

そのジミーもどきのミネさが、わが家へ来て「この家、あったけえ」と一人ごとのようにつぶやいた。彼がシュンスケにでなく、私に言った最初の言葉だった。出会ってから、十日もすぎていた。寒がりのくせに薄着のミネさだ。そして彼の家は大邸宅、それにひきかえて、わが家の茶の間は四畳半、小さなストーブでも、汗が出るほど暖かくなるのだ。

通学しはじめて二週間目の夜、担任のA先生から電話が入った。

「えー、うちの中学では生活指導を厳しくしておりますので、そのー、皆まじめな子供ばかりですが、あー、そのー、ごく一にぎり、そのー、グレてるといいますか、えー、友人関係に充分気をつけていただきたいと、まあ……」

ずい分親切な先生もいるものだ。夜九時をまわっているというのに、わざわざ電話で忠告してくれるなんて……さすがに教育県だ。

それで終れば問題はなかった。二、三日おいて全く同じ意味、同じ歯切れの悪さで電話がかかってきた。そして翌日も、その二日後も……あまり度重なると妙な気分だ。

同じ言葉をくり返すってことは、それとなく何か重大なことを知らせたがっているんじゃないか、こちらが、早く気づかないので幾度もかけて寄こすのだろうか。何てにぶい親だとバカにしているのかもしれない。

そうこう考えているうちに、夜ごとのコールに妙なふくみが加わってきた。

「そのー、いまつき合っている子の中に、あー、もしかするとあまり良くない子がいるようでして……」これで、この件に関する六回目の電話である。たまりかねてたずねてみた。「いったい誰のことですか」

すると途端にA先生の声が途切れた。今つき合っている子といったって、ここへ来て半月かそこら、それに元来人なつっこい性分ではない。ミネさしかいないじゃないか。

無口でシャイ、朝は早々と寝坊の息子を叩き起こしてくれる、制服もきちんと当り前だ。いったい彼のどこが気に入らないというのだろう。私もシュンスケに負けないほどミネさびいきになっていた。

ミネさの名を出して、もう一度たずねると、先生はにわかに大あわてだ。

「やっ、べ、別に、誰それということではなくて……そ

のー、とりあえず注意していただくということで……」いったい何のこっちゃ。

この町では中学生はズックの背負いカバンをかつぐ。大きく校章入りのこれをしょってしまうと、誰でもひどく幼く見える。いくらツッパッたって、背中にランドセルの親分みたいなものを背負ったら、どうにもサマにならない。東京の中学のときのまま、肩さげカバンを下げているシュンスケが、ひどくうき上がって見える。

土曜日、例によって肩を並べて帰ってきた二人に聞いてみた。A先生がむやみに電話してくること、その内容たるや支離滅裂なこと……フム、フムとうなずいていたミネさの顔がにわかに厳しくなった。

「あいつ、電話魔せー。それも夜ばっか、女のつげ口みてえなこと、グチャグチャ……ああやって、仲たがいさせるんだ」

そうか。私はハタとひざを叩いた。あんなふうに違まわしにほのめかされれば、親は、身近かにいる子供の友人の誰彼を頭にうかべた上で、「あの子とつき合っちゃダメ」などと言い出すだろう。不良は群れなければ、ただのオチコボレだ。先生にとってこわいものではない。妙に、仲の良いシュンスケとミネさ、そして二人を囲んで少しずつ広がってくる輪……夜毎のひそやかなコールは、〝非行の芽をつむ〟という名目の上に成り立っているのだろう。

「俺、あんなことする奴、大嫌いせー、もう、学校じゃあ有名なんだ。昔っから、チクリ魔って言われてさ。それでいて、俺たちに面と向うとゴマすりで……」

ミネさは、いつになく多弁だ。上目づかいに宙をにらみつけると、見たこともない表情になった。甘えと反抗がないまぜになった少年の気むずかしさ、ハッとするほどジェームス・ディーンに似ている。

今まで何を話していたのかケロリと忘れて、「似てるねえ」と言うと、頬に深いしわを刻みこんで照れた。そうすると、ますます似てくるのだった。

若くして自動車事故で世を去ったジミー、このときは、まさか、その最後の様までが同じになろうなどと、夢にさえも思っていなかった私と息子であった。

われらの県営住宅は八軒長屋だ。わが家はそのほぼまん中、ドレミファソラシド、のファにあたる。ハモニカ長屋とはうまくつけた名前だ。

北に玄関、南に勝手口、それぞれに三坪ほどの庭がついている。以前住んでいた人は、かなり無精だったらし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com